



日本語コーパスを用いた漢語動名詞の記述的分析－ 日本語教育への応用－

陳, 迪

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2025-03-25

(Date of Publication)

2026-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第9096号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496377>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式 3)

論 文 要 旨

氏 名 陳 迪
専 攻 グローバル文化専攻
指導教員氏名 石川 慎一郎

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)
日本語コーパスを用いた漢語動名詞の記述的分析ー日本語教育への応用ー

論文要旨

日本語の語彙には、「努力」「勉強」など、単独で名詞として使われるが、「する」をつけることでサ変動詞としても使われる漢語名詞が存在している。このような語は、名詞と動詞の両方の特徴を有するもので、本研究ではこれらを「漢語動名詞」と呼ぶ。

漢語動名詞は、量・質両面で、日本語語彙の重要な一部となっている。野村(1999)は、基本漢語 3,000 語の 36.3%が、サ変動詞語幹になりうる動態類 2 字漢語名詞、つまり、いわゆる漢語動名詞であると指摘している。しかし、漢語動名詞が全体として高頻度であるとしても、現代日本語の書き言葉・話し言葉において、どのような漢語動名詞が高頻度かつ汎用的に使用されており、かつ、それらがどのような具体的用法を有しているのかといった点については必ずしも明確な指針が得られない。

また、漢語動名詞は、文法的に、際立った特徴を有する。影山(1993)は漢語動名詞を含む動名詞全般を日本語の主要な語彙範疇とみなすことを提案し、名詞・動詞・動名詞の間の複雑な関係性を整理している。影山によれば、動名詞は、単独で主語や目的語として使われるという点や、用途を表す「～用」と共起するという点で名詞との共通性を持ち、尊敬語の「お／ご～になる」、依頼表現の「お／ご～ください」と共起するという点で動詞との共通性を持つとされる。しかし、動名詞はまた、「する」をつけると形態的にサ変動詞になって、文中で述語や連体修飾語として使用できるという点で、名詞とも動詞とも異なる顕著な固有特性を持つ。このことは、動名詞全般、とくにその中核を占める漢語動名詞の特殊な言語特性を示唆するが、主要な漢語動名詞の各々が、現代日本語において、それぞれ、名詞と動詞のはざまにどのような品詞特性、さらにはより広い言語特性を有しているか、という点についてはいまだ全体的な理解が得られていない。

以上で見たように、漢語動名詞は、その語彙としての重要性とは裏腹に、重要漢語動名詞の特定や、その基本的用法の解明という点で、今なお未解明の問題が残されている。このことは、日本語教育にも間接的な影響を与えている。実際、日本語教育、とくに世界の日本語学習者の多数を占める中国語母語の日本語学習者(L1 Chinese learners of Japanese : CLJ)対象の日本語教育において、漢語動名詞が主要な指導項目として取り上げられ、明示的

で体系的な指導がなされることはほとんどない。

もっとも、CLJ は豊富な漢字知識を有しているため、母語の知識を応用して漢語の意味を推定することができることから、漢語動名詞の習得は容易であるように見えるかもしれない。しかし、実際に産出した作文を調査すると、CLJ であっても、漢語動名詞に関連する誤用や不自然な用例は極めて多い。こうした現状を改善するためには、高頻度で汎用的に使用される漢語動名詞を特定した上で、それらを多角的に分析し、得られた知見を根拠として、漢語動名詞の効果的な習得を支援する教材や教授システムの開発を行うことが不可欠である。

そこで、本研究は、コーパス言語学の研究理念と研究手法に基づき、現代日本語の大規模コーパスを活用し、日本語学の観点から漢語動名詞の諸特性を詳細に調査・記述・整理した上で、各種の日本語学習者コーパスを活用し、学習者の抱える漢語動名詞の使用上の問題を考究する。これらをふまえ、最終的に、日本語学習者、とくに CLJ の漢語動名詞習得を支援しうる教材の在り方について基礎的検討を行うことが本研究の主たる目標である。

以上の立場に基づき、本研究は、(1) 重要漢語動名詞の抽出、(2) 形態論・統語論・意味論・語用論・対照語彙論などの一般言語学的観点から見る漢語動名詞の使用特性の解明、(3) 日本語教育における漢語動名詞の使用特性の解明、(4) CLJ を対象とした漢語動名詞指導教材の開発、の 4 点に注目し、これらを全 4 部、全 13 章の中で議論していく。以下、各部・各章の内容について簡潔に要約する。

まず、第 I 部「研究の枠組み」では、本研究の枠組みについて説明する。第 1 章では、漢語動名詞の定義および呼称を確認した上で、現代日本語および日本語教育における漢語動名詞の重要性を概観し、本研究のねらいと構成を説明する。第 2 章では、これまでの漢語動名詞に関する研究を詳しく見ることとする。第 3 章では、本研究で使用したデータと統計手法について概観する。

次に、第 II 部「漢語動名詞の特性」では、頻度論の観点から現代日本語における重要漢語動名詞を抽出した上で、それらの統語的・意味的特性について計量的に調査して考察する。第 4 章では重要漢語動名詞の抽出、第 5 章では漢語動名詞の品詞性、第 6 章では漢語動名詞の連体修飾用法、第 7 章では漢語動名詞の意味記述、にそれぞれ注目して調査する。

第 III 部「中国語を母語とする学習者の漢語動名詞使用傾向の解明」では、CLJ の漢語動名詞の使用実態（誤用率、産出量、語彙難度、特徴語）を調査したあと、対照語彙論の観点から中国語と日本語の漢語動名詞比較を行う。また、学習者の使用実態の分析にあたっては、CLJ の特性を多角的に見るため、日本語母語話者だけでなく、英語母語の日本語学習者（L1 English learners of Japanese : ELJ）および朝鮮語／韓国語母語の日本語学習者（L1 Korean learners of Japanese : KLJ）との比較も行う。第 8 章では学習者による発話・作文中の漢語動名詞の計量的な使用実態を調査する。第 9 章では学習者による日中同形漢語動名詞の使用特徴、第 10 章では中国語と日本語における同形漢語動名詞の対応性を考察し、中国語からの影響を検証する。

第 IV 部「中国語を母語とする学習者向けの漢語動名詞指導の展望」では、本研究で得られた知見を実際の日本語教育に応用するため、まず現時点での CLJ における漢語動名詞に関する知識の把握状況を調査し、その後、CLJ 向

け教材の開発に向けた準備作業を進める。第 11 章では、CLJ が漢語動名詞にどの程度の知識を持っているかをテストにより調査し、これまでの学習経験や意識についてもアンケートを実施する。第 12 章では、本研究で明らかになった漢語動名詞の各側面の特性をもとに、解説シートおよび問題シートの開発を試みる。

最後に、第 13 章において、本論文の内容についてまとめ、課題と制約、また、今後の研究展望について概観する。

論文審査の結果の要旨

氏名	陳 迪			
論文題目	日本語コーパスを用いた漢語動名詞の記述的分析－日本語教育への応用－			
判定	合 格 ・ 不 合 格			
論文チェックソフトによる確認	<input checked="" type="checkbox"/> 確認 (2025/1/28 に実施) <input type="checkbox"/> 未確認 理由：			
審査委員	区分	職名	氏名	論文審査結果について
	委員長	教授	佐藤 健	<input checked="" type="checkbox"/> 確認
	委員	教授	石川 慎一郎	<input checked="" type="checkbox"/> 確認
	委員	講師	陳 暁	<input checked="" type="checkbox"/> 確認
	委員	統計数理研究所・ 准教授	前田 忠彦	<input checked="" type="checkbox"/> 確認
要 旨				
<p>【概要】 学位申請者陳迪氏の論文「日本語コーパスを用いた漢語動名詞の記述的分析－日本語教育への応用－」（本体 339 ページ、付録等 96 ページ、全 435 ページ）は、日本語学習者にとって習得が困難とされる漢語動名詞（「努力」「勉強」など、「する」を付加することでサ変動詞化する漢語名詞類）を対象として、コーパス言語学の分析手法に基づく詳細な分析を行い、その用法を多面的に解明し、日本語教育への応用の可能性を論じたものである。</p> <p>【提出論文の構成と内容】 本論文は、全 4 部、13 章から構成される。まず、第 I 部「研究の枠組み」には 3 つの章が含まれる。第 1 章「はじめに」では、漢語動名詞の定義および呼称を確認した上で、現代日本語および日本語教育における漢語動名詞の重要性を概観し、本研究のねらいと構成を説明する。第 2 章「先行研究」では、当該テーマに関する過去の研究が整理される。第 3 章「データと手法」では、本研究で使用したデータと統計手法についての概観がなされる。</p> <p>第 II 部「言語学的視点に基づく漢語動名詞の特性分析」には 4 つの章が含まれる。第 4 章「頻</p>				

度論から見た漢語動名詞・重要漢語動名詞の抽出」では、各種コーパスから得られた多様な頻度を合成することで以後の分析のベースとなる重要漢語動名詞の特定がなされる。第 5 章「品詞論から見た漢語動名詞」では、新たな動詞性・名詞性判定テストを考案し、名詞・動詞の中間的位置づけにあるとされる漢語動名詞の実際的な品詞特性を議論する。第 6 章「統語論から見た漢語動名詞・連体修飾節に注目して」では、漢語動名詞の連体修飾構造に着目し、漢語＋スル＋名詞、漢語＋ノ名詞、漢語＋的（ナ）＋名詞などの構造の典型性を議論する。第 7 章「意味論から見た漢語動名詞・類義動詞の使い分けに注目して」では、漢語動名詞の「利用」を取り上げ、その関連語である「使用」「活用」「使う」「用いる」等を同時に比較することで、類義語ネットワークにおける漢語動名詞の位置づけを検討する。

第Ⅲ部「中国語を母語とする学習者の漢語動名詞使用傾向の解明」には 3 つの章が含まれる。第 8 章「中国語母語の学習者による漢語動名詞の全体的使用状況」では、当該学習者に加え、英語・韓国語母語の学習者と日本語母語話者による日本語発話中での漢語動名詞の使用実態（誤用率、産出量、語彙難度、特徴語）が比較され、漢語知識を有する中国語話者であっても、漢語動名詞の使用が必ずしも容易ではないという結論が導かれる。第 9 章「中国語母語の学習者による日中同形漢語動名詞の使用特徴」では、日本語学習者コーパス・日本語コーパス・中国語コーパスから得た書き言葉・話し言葉データを多角的に比較することで、中国語母語話者が日本語の「準備」「確認」と、両語に相当する中国語の「准备」「确认」をどのように使用しているのか、コロケーションに着目しつつ比較する。第 10 章「中国語と日本語における日中同形漢語動名詞の対応」では、中国語母語話者の日本語感動名詞使用における母語干渉を調査すべく、日本語訳の SF 小説作品と、その中国語原典版における漢語動名詞が質的に比較される。

第Ⅳ部「中国語を母語とする学習者向けの漢語動名詞指導の展望」には 2 つの章が含まれる。第 11 章「中国語母語の学習者の漢語動名詞の運用能力と意識」では、中国本土で日本語を学ぶ大学生 49 名を対象として実施された漢語動名詞の知識と運用能力調査の結果が概観される。同調査によれば、中国語母語学習者の多くは日本語の漢語動名詞の運用に自信を持てておらず、また、指導も十分ではない実態が浮かび上がってくる。第 12 章「中国語母語の学習者を支援する漢語動名詞教材の方向性について」では、頻度・品詞・統語特性・意味特性・同形語の 5 観点につき、本論文の分析で得られた知見を教材化する試みが示される。また、作成した教材案のさらなる改善の余地を探るため、中国本土の大学で日本語を教えるベテラン教員に半構造化インタビューを実施し、得られた知見に基づき教材の改訂案が示される。

最後に、全体のまとめとなる 13 章「本研究で得られた知見および制約と課題」では、各章の知見が改めて整理される。また、研究上の制約とその改善に向けた今後の展望が示される。

【総合評価】 本研究は、実証データに基づく研究が不足していた漢語動名詞を対象を絞り、コーパス言語学的手法により、現代日本語における用法と、中国語母語の日本語学習者にとっての習得上の問題を多面的に研究したものであり、漢語動名詞の複雑な言語的振る舞いの諸相に関して重要な知見を得たものとして価値ある研究成果の集積であると認める。よって、学位申請者の陳迪氏は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。